

---

## 開催趣意

---

清里ミーティングは、1987年9月、自然体験・野外教育・環境教育に関心を寄せる人たちが山梨県清里に集まり「第1回清里フォーラム」を開いたことからスタートし、今年で記念となる通算30回目となった。2016年11月5日（土）～7日（月）の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

### ■ 清里ミーティングの目的

このミーティングは、主に以下の3点を全体のテーマとしている。

1. 海外や国内各地で取り組まれている最新の環境教育に関する情報の共有
2. 参加者同士のネットワークの構築
3. それぞれの環境教育活動を理解し、理念や意識の共有

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催している。

### ■ 清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であること。

どのようなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体で作り上げていくという性格を持ち、主催側で企画したプログラムのほかに、参加者の皆様の中からプログラムを企画・実施して下さる方を募って開催している。

### ■ 今年の特徴

2016年のテーマは「環境教育の未来を考える！あなたの次の一步は？」と題した。清里ミーティングの30回をふりかえりつつ社会背景と環境教育の動きを改めて見直し、また海外の視点から日本の環境教育への期待と提案を受けることを通して、環境教育の現状を見つめなおし、これからの未来を描くために必要な要素や育むべきスキルを考える機会とした。

最後は参加者ひとりひとりが、自身の「次の一步」として、これから自分がどう行動していくかの宣言をキーワードで書き出した。ひとりにとっては一步でも、200人いれば200歩になる。環境教育が今後もさらに発展していくために、各自が自分にできることを一歩ずつ進めていこうとまとめ、通算30回目の清里ミーティングは終了した。

1日目 11月5日(土)

時間	内容	会場
10:30～	受付開始	新館フロント前
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画 (自由参加)	新館ホール
12:45～13:00	開会式の前に、ちょっとご報告!	新館ホール
13:00～13:30	開会式	新館ホール
13:30～15:10	●全体会1「これまでの環境教育をふりかえる」 ファシリテーター:川嶋 直(JEEF 理事長) ●「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」ゲスト紹介	新館ホール
15:05～16:00	休憩・チェックイン	
16:00～18:25	10分プレゼンテーション第一部(4会場同時実施 × 7ラウンド)	新館ホール 新館ホール前(ホワイエ)
18:25～20:25	夕食	新館レストラン 新館ホール
20:25～21:00	10分プレゼンテーション第二部(3会場同時実施 × 2ラウンド)	新館ホール
21:00～21:05	休憩・交流会場設営	新館ホール
21:05～21:30 ・全員参加 21:30～ ・フリータイム	情報交換会: ●「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設 ●「環境教育リクルート」コーナー開設 ●軽食、お飲み物をお出しする「Bar」もOPENします	新館ホール

2日目 11月6日(日)

時間	内容	会場	
7:00～8:00	早朝ワークショップ(自由参加)		
	1	ヨガと瞑想	各会場
	2	甲虫の玉虫でアクセサリを制作してみよう	各会場
	3	冬鳥と出会い、地球を感じよう	各会場
	4	清里朝散歩	各会場
7:30～8:30	朝食	新館レストラン 新館ホール	
9:00～11:40	160分ワークショップ 午前の部 (昼食・・・お弁当を各ワークショップ会場に配ります)		
	①	持続可能な社会づくり、企業の役割とは	各会場
	②	持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」	
	③	『エディブル・スクールヤード』をはじめよう!	
	④	環境教育業界×私たち、若手の関わり方	
	⑤	祝30周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る	
	⑥	自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑦ エネルギー大臣になろうワークショップ</li> <li>⑧ 清里ミーティング「30+30」</li> <li>⑨ 森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵</li> <li>⑩ “環境”=“地球”を感じてみよう!天文のイロハ for 環境教育</li> </ul>	
12:00～13:00	●ポスターセッション ※出展団体は、可能な範囲でポスターセッションへのご参加をお願いします。	本館ホール
12:00～13:10	休憩・昼食・移動（昼食はワークショップ午前の部の会場で配布いたします）	
13:10～14:30	<b>80分ワークショップ ①</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>⑪ CEPAって何の略？地域をつくる湿地教育を考える</li> <li>⑫ 森が薫る燻製づくり</li> <li>⑬ 一流を学ぶ・・・第一印象と名刺交換</li> <li>⑭ 「水の足跡」-スペース・ウォークを使って-</li> <li>⑮ 環境・CSR 活動評価チェックリストを使ってみよう</li> <li>⑯ 海の森からの贈り物～海藻おしば～</li> <li>⑰ 告知・広報に活かす”伝わる”、”伝える”文章講座</li> <li>⑱ 環境教育と家族</li> <li>⑲ アクティビティを再生する</li> <li>⑳ 野外での事故に備えよう！「野外・災害救急法」の体験</li> </ul>	各会場
14:30～14:50	休憩・移動	
14:50～16:10	<b>80分ワークショップ ②</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>㉑ いま「公害教育」を考える</li> <li>㉒ 「いつもの暮らし」を環境教育プログラムに！</li> <li>㉓ 「自然から学ぶ場と人の全国フォーラム」中間検討会</li> <li>㉔ SDGs でつなげる地域と活動ワークショップ</li> <li>㉕ 銀粘土で作る リーフモチーフの純銀アクセサリ</li> <li>㉖ 幻想は捨てよう！NPO と行政のミゾを埋める80分</li> <li>㉗ 火を囲み、みんなで作る「居場所」づくり</li> <li>㉘ マジックで環境教育に活用する</li> <li>㉙ 拡げよう！特定外来生物駆除活動の輪！</li> <li>㉚ 持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方2</li> </ul>	各会場
16:10～16:30	休憩・移動	
16:30～18:30	<b>●全体会2「日中韓スウェーデンの環境教育比較研究」</b> パネリスト:リ・ヤンヤン(駒澤大学 教授) パネリスト:ウオン・ジョンビン(日中韓環境教育協力会コーディネーター、学習院大学非常勤講師) パネリスト:レーナ・リンダル(Link & Learn International 代表) パネリスト:阿部 治(JEEF 専務理事)	新館ホール
18:30～20:30	夕食	新館レストラン 新館ホール
19:00	★翌日の「当日募集ワークショップ」実施者エントリーの締め切り	

21:05～23:00	<b>情報交換会 ※全体での時間はございません</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 理事バンド</li> <li>● 「人と組織の紹介処(コンシェルジュデスク)」開設</li> <li>● 「環境教育リクルート」コーナー開設</li> <li>● 軽食、お飲み物をお出しする「Bar」も OPEN します</li> </ul> ★21:30 翌日の「当日募集ワークショップ」参加者エントリーの締め切り	新館ホール
-------------	--	-------

### 3 日目 11 月 7 日(月)

時間	内容	会場
7:30～8:30	朝食	新館レストラン
8:30～9:00	チェックアウト	
9:00～11:30	<b>当日募集ワークショップ</b>	各会場
11:30～11:45	移動	
11:45～12:30	<b>●全体会3「全員参加型ディスカッション</b> <b>～環境教育の未来を 考える！あなたの次の一歩は？」</b>	新館ホール
12:30～12:45	<b>閉会式</b>	
12:45～13:45	<b>さよならパーティ(立食)</b>	新館レストラン
14:00～15:00	<b>オプション企画</b> 会場であるキープ協会の歴史や環境に対する取り組みを紹介するツアーを行います。(事前申込み不要。期間中に参加募集します) <ol style="list-style-type: none"> <li>① 清泉寮ペレットボイラー見学ツアー</li> <li>② 清里開拓の歴史ツアー</li> <li>③ 聖ヨハネ保育園見学ツアー</li> </ol>	各会場

---

## 1日目 開会式・全体会1

---

開会式の前に、ちょっとご報告！

司 会： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 事業部 清水 誠二  
※10月開催の大阪マラソンで頂いた寄付とその使い道についてのご報告。

開会式

司 会： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 事業部 垂水恵美子  
主催者挨拶： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF） 会長 岡田 康彦  
来賓 挨拶： 環境省総合環境政策局 局長 奥主 善美 氏

全体会1「環境教育の30年をふりかえる」スライドショー

ファシリテーター： 公益社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）理事長 川嶋直



## 開会式

主催者挨拶 : 公益社団法人日本環境教育フォーラム (JEEF) 会長 岡田 康彦

皆さんこんにちは。30回という記念すべきこの回に多くの方が参加していただき、大変喜んでおります。今回は、初めてのことが多いと思います。先ほどの表彰もそうですし、環境省の環境事務次官と総合政策局長がおふたり揃って来ていただいています。過去にも何度か環境省の幹部には来て頂いていますが、次官は初めてだと思いますし、次官と担当局長がふたりそろい踏みでいらしたのも初めて。30回ならではだと思っています。私はいつも開会の挨拶でヨーイドンだけ言えばいいのですが、今回はひとつだけ、お話ししておきたいことがあります。



今回のテーマに絡みますが、30回ということに思いを馳せてみると、私の頭には「不易流行」という言葉が浮かびます。松尾芭蕉が言い始めた言葉だと思いますが、不易というのは変わらない、流行ははやりです。要するに、変わらずあるものと、時代とともに変わっていくべきものがあり、それが同時に存在しているということです。これが、長い歴史で必ず起こる大切なことです。流行の方について申し上げれば、今回、20回以上参加で表彰を受けた方を中心に、昔から来て頂いている方がいると同時に、今回初めて参加された方も多くいます。この伝統ある清里ミーティングの息吹を吸い取ってもらうと同時に、自分自身を「流行」として新たな視点を清里ミーティングに吹き込んでほしい。両方を同時にやって頂く場になったらいいと思っています。

以上、少し長くなりましたが皆様の歓迎の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

来賓挨拶 : 環境省総合環境政策局長 奥主 善美 氏

ただいまご紹介に預かりました、環境省総合環境政策局長の奥主です。まず清里ミーティング 30周年のこれまで長い皆様のご努力、本当に敬意を示したいと思います。また、これまで清里ミーティングを続けてこられましたキープ協会、日本環境教育フォーラムの皆さま、そしてなりよりミーティングに参加を続けた皆様方には、日本の環境教育の盛り上げということに、深く感謝を申し上げたいと思う次第です。



環境省といたしましても、2001年に環境省が発足した時に環境教育推進室を設置し、様々取り組んでまいりました。昨今では、ヨハネスブルクサミットで NGO との協働提案から生まれた国連 ESD の 10 年やその後継プログラムを受けて、政府といたしましても我が国におけるグローバルアクションプログラム実施計画を 2016 年 3 月に策定するなど、ESD、そして持続可能な開発のための教育に力を注いでおります。その一環といたしまして、阿部先生をはじめとした関係の皆さまのご指導の下、環境省は文部科学省や関係省庁、関係者と協力し、地域が必要とする取組の支援や情報・経験を共有し、ESD 活動に取り組むさまざまな主体が参画・連携し、ネットワークを形成することを目的とする全国 ESD 活動支援センターを 4 月に設置しました。もちろん環境教育の普及は、中央でできることだけでなく、地元との連携が重要です。そうした観点から、来年度には全国 8 か所で地方 ESD 活動支援センターを設立する予定です。こうした取り組みをもとにこの場の皆様とも連携を深め、ESD を活性化させていきたいと考えております。ぜひ今後ともご協力をお願いしたい次第でございます。

最後になりましたが、皆様方と一緒に清里ミーティングのますますの発展、そしてそれを踏まえた環境教育のますますの進展を祈念いたしまして、お祝いの挨拶とさせていただきます。この度はおめでとうございます。

## 全体会1「環境教育の30年をふりかえる」スライドショー

清里ミーティングが始まった1987年から、今回で30回目の開催となる。

全体会1では、スライドショーで30回をふりかえると同時に、その間に行われてきたネットワーク構築や人材育成、事業、書籍の発刊、ミーティングの工夫などについて日本環境教育フォーラムの理事長・川嶋から紹介された。また、スライドショーの間には参加者の中から、当時の関係者に各1分ずつコメントを頂いた。



### コメント者一覧

1987年第1回清里フォーラム開催	小河原 孝生 氏 (特定非営利活動法人生態教育センター)
第1～5回にボランティアとして参加	加藤 春喜 氏 (特定非営利活動法人白川郷自然共生フォーラム)
1997年社団法人日本環境教育フォーラム設立	岡島 成行 氏 (青森山田学園理事長/JEEF 副会長)
地域ミーティングの皮切り 千刈 (関西) ミーティング	高田 研 氏 (都留文科大学)
中四国環境教育ミーティング	徳永 豊 氏 (スリーヒルズ・アソシエイツ)
環境教育ミーティング中部	山田 俊之 氏 (特定非営利活動法人白川郷自然共生フォーラム)
東北環境教育ネットワーク	谷口 哲郎 氏 (特定非営利活動法人つがる野自然学校)
環境教育関東ミーティング	伊藤 由季 氏 (東京都立小峰公園ビジターセンター)
様々な人材育成事業 市民のための環境公開講座	出口 裕康 氏 (公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団)
森の人づくり講座	猪俣 寛 氏 (公益財団法人日本野鳥の会)
自然学校指導者養成講座	新田 章伸 氏 (特定非営利活動法人里山倶楽部)
損保ジャパン日本興亜 CSO ラーニング制度	牧野 真弓 氏 (長野市地域おこし協力隊)
愛・地球博 森の自然学校 里の自然学校	木邑 優子 氏 (有限会社グレイスアカデミー)
様々なネットワークが誕生 日本環境教育学会	小玉 敏也 氏 (麻布大学教授)
NPO 法人自然体験活動推進協議会 (CONE)	安西 英明 氏 (公益財団法人日本野鳥の会)
持続可能な開発のため教育 (の10年) 推進会議	村上 千里 氏 (ESD 活動支援センター)
NPO 法人日本エコツーリズムセンター	森 高一 氏 (特定非営利活動法人日本エコツーリズムセンター)
一般社団法人 RQ 災害教育センター	八木 和美 氏 (一般社団法人 RQ 災害教育センター)

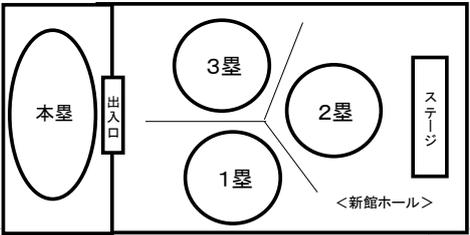
国際的なネットワークも誕生 日中韓環境教育ネットワーク (TEEN)	阿部 治 氏 (立教大学教授/JEEF 専務理事)
その他の JEEF 事業のご紹介 ジャパン GEMS センター	高木 幹夫 氏 (日能研)
東京シニア自然大学	瀬尾 隆史 (JEEF 事務局長)

以上



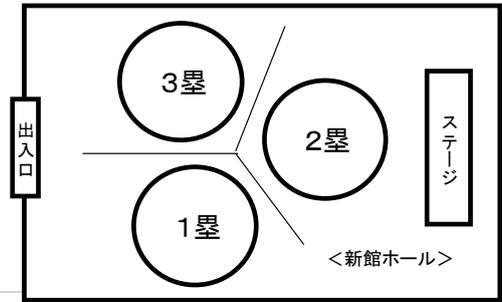
1日目 10分プレゼンテーション

参加者・参加団体の活動報告や話題提供、PRなどを10分の持ち時間でパワーポイント、KP法、模造紙などの手法で発表した。発表者には、参加者からフィードバックが寄せられた。

【第一部】16:00～18:25(予定) ※発表時間は各回10分です					
		(敬称略)			
【場所: 本壘】		【場所: 1壘】	【場所: 2壘】	【場所: 3壘】	
① 16:05	<b>本壘-1</b> 『ヤシ砂糖がつかないインドネシアの環境保全』 加藤 超大(公益社団法人日本環境教育フォーラム)	<b>1壘-1</b> 『キャンプファイアーの真実!?』 山岡 真己子 (立教大学大学院)	<b>2壘-1</b> 『社会貢献活動(エコ×エネ体験PJ)と社内理解』 小西 金平 (J-POWER電源開発株式会社)	<b>3壘-1</b> 『経済優先思考になっちゃう西暦vs循環基調の月暦(旧暦)』 齊藤 透 (く月の会・東京)	
	JEEFではインドネシアの豊かな自然のなかで暮らす人々が森林伐採や密猟などの環境破壊に従事することなく、自然と共生した暮らしの実現を目指すために、ヤシ砂糖や天然ハチミツなどの自然資源から安定した収入を確保し、将来にわたって持続可能な生活を維持していけるよう、自然の恵みを活かした製品の生産に取り組んでいます。今回はヤシ砂糖の事例について発表します。 ※ヤシ砂糖を使った美味しいお菓子の試食できます！	キャンプにつきもののキャンプファイアーですが、その起源はどこにあるのか？何故キャンプファイアーをするのか？キャンプファイアーに「型」はあるのか？未来のキャンプファイアーはどんな感じ？？？ 皆さまと考えてみたいと思います。よろしくお願いたします。	J-POWERグループが「エネルギーと環境の共生」を目指して取り組む社会貢献活動(エコ×エネ体験プロジェクト)は、事務局メンバーだけでなく、他部署の社内若手社員も運営に参加しています。 が、社内の若手社員の参加を確保するのに苦労しており、同様な課題を持つ事務局メンバーも多いのではないのでしょうか。小学生親子向けツアー(1泊2日)の運営事例の紹介をもとに、解決のヒントを見つければ……。	知りたくないとは思いますが、西暦(太陽暦)しか知らない皆さんは、太陽＝明るさ・強さを是とする価値観、そこから生れる経済効率優先思考にとっぷり染まっています。対して夜を主とし、水・生命の循環を基調とするのが月暦(旧暦)。知らないからオカルト的に見えるのですが、実は科学性も太陽暦より上。せつかく日本にいながら、ましてや環境に携わるなら「西暦しか知らない」なんてもったいない。科学・文化・歴史・風土、万事につながるファンの小ネタの宝庫でもあります。	
② 16:25	<b>本壘-2</b> 『東京都内の里山の公園！小峰ビジターセンターの紹介』 伊藤 由季(東京都立小峰公園ビジターセンター)	<b>1壘-2</b> 『自然体験型環境教育プログラム—王子の森・自然学校』 石井 真樹子(王子ホールディングス(株))	<b>2壘-2</b> 『環境教育活動をぜひ大学生と！大学生が秘める可能性！』 多田 正和(岡山理科大学 自然を学ぶ会NSS)	<b>3壘-2</b> 『倍率じゃあないんだよ！双眼鏡・望遠鏡講座』 中村 照夫	
	東京都立小峰公園は、共有の草刈り場として古くから地元の人々に利用されていた里山につくられた公園です。「多摩の里山見本園」をコンセプトに、さまざまな里地・里山の管理が行われています。昔も今も変わらず人と自然がつながり合うこの地で、小峰ビジターセンターがどのように機能し、どんな活動を行っているのか、お伝えしたいと思います。	王子の森・自然学校は、王子ホールディングス(株)が提供する自然体験型環境教育プログラムです。小学4年生～中学1年生までを対象に2泊3日で森や沢での遊びや紙すき体験、弊社の工場見学を通じて「森・人・産業のつながり」を学びます。JEEF様との共催で2004年から始まり、今年で12回目を迎えます。今回は自然学校のご紹介とともに皆さまから、これからの企業が行う環境教育についてご意見を頂きたいと思っています。	岡山県内では、観察会や保全活動を通じて環境教育活動が行なわれている。岡山理科大学自然を学ぶ会NSS(大学サークル)に所属する大学生は、これらの活動に広く携わっている。大学生が携わることで、活動全体、活動の主催者、大学生自身に様々な効果をもたらしている。今回は、大学生が携わる環境教育活動の事例を報告すると共に、大学生が携わることで活動全体にどのような効果をもたらしているかをお伝えする。	カタログ検討で目を惹く項目、倍率。市場の売れ筋は高倍率。像質追求低倍率では売れない。メーカーもやむなく承知の上、高倍率・低品質の売れ筋商品を大量に生産・販売。結果、市場には低品質商品で溢れユーザー選択肢も目に触れるものから。観察対象の本質には到底追いつけぬ製品を手にする。倍率！それはただの計算(結果)値。本質を目にしたときのあの感動、「おおお～ッ」と唸る声など聞こえるはずもない。	
③ 16:45	<b>本壘-3</b> 『ひとりじゃない！仲間は全国に！★ユースミーティング』中谷 翔(南越前町地域おこし協力隊)河又 彩(泊江市立緑野小学校)中村 例(特定非営利活動法人キッピーレンズ)中村 幹	<b>1壘-3</b> 『自然体験を通じて、子どもの感性を養いませんか?』 平橋 武 (キタイ設計株式会社)	<b>2壘-3</b> 『環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」の魅力』 柳内 麻貴(一般財団法人公園財団<プロジェクト・ワイルド>)	<b>3壘-3</b> 『イクメンクラブの取り組み』 佐野 由輝 (特定非営利活動法人イクメンクラブ)	
	ユースミーティングは私たちが清里ミーティングで出会い、同年代で語ることの楽しさを知ったことが始まりでした。職場では同年代がいなく孤独を感じる時があると思います。職場は違えど、同じように頑張っている仲間がいれば頑張れる、そんな関係性を作ればいいなと思っています。1年目は白川郷、2年目には田貫湖で開催。大人数ではなく少人数だからこそ、主体的に取り組める。そんなユースミーティングを紹介します！	「里山サバイバルクラブ」では、里山での、自然とのふれあいや体験を通じて、自然の大切さや活かし方を楽しみながら学ぶとともに、親子や地域外の人との交流を深めることを目的としています。また、人口減少社会が進む中で、美しい里山を未来の子供達につなげていくための、社会貢献活動の一端につなげていきます。※大学、植物園、水族館、キタイ設計株式会社等、多数のメンバーで構成し、各地域や各団体に派遣が可能	幼児～大人まで「自然や環境のために行動できる人」として育てる「プロジェクト・ワイルド」。アメリカで長い月日をかけて教育者・環境保全・産業界の代表者等も参加し開発された環境学習/教育プログラムである。現在150万人以上の指導者が全世界で養成されており、日本の他、カナダ、チエコ、インド、スウェーデン等世界各国の教育現場でも導入されている。国際的な視点と日本の良さを織り交ぜた魅力的な本プログラムをご紹介します！	NPO法人イクメンクラブは、父親を中心とした任意団体として2006年より活動を始め2011年にNPO法人として認可されました。「イクメン」という言葉を世の中に普及させることで、父親の育児参加を促し、少子化の歯止めにもなしていこう！そんな社会を実現するために、はだし運動会、料理教室、イクメンキャンプなどのイベントを実施し、環境教育的要素も入れながら、子どもたちを多様な世界へ導きたいと考えています。	

<p>④ 17:00</p>	<p>本壘-4 『山梨英和中学校・高等学校の環境教育』 御園生 真美 (山梨英和中学高等学校)</p>	<p>1壘-4 『心の距離を近づける「マナー」・私の第一印象は?』 木邑 恭子 (有限会社グレイスアカデミー)</p>	<p>2壘-4 『環境教育に取り組むために必要な科学技術リテラシー』 小寺 昭彦 (サイエンスカケルプロジェクト)</p>	<p>3壘-4 『園芸から環境教育へ・アグロエコロジーの教育から学ぶ』 浅岡 みどり (恵泉女学園大学)</p>
<p>⑤ 17:20</p>	<p>本壘-5 『南の島・台湾から見た「里山」とは?』 リン イーリン (立教大学大学院)</p>	<p>1壘-5 『山と、人びと』 落合 志保 (立教大学大学院)</p>	<p>2壘-5 『全米に広がるエディブル・スクールヤードとその背景』 西村 和代(一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン)</p>	<p>3壘-5 『本を作ることは武器になる!』 新津 里子 (NPO法人都留環境フォーラム)</p>
<p>⑥ 17:40</p>	<p>本壘-6 『「環境教育×私」・・・その目的は?』 後藤 清史(野たまご環境教育研究所(野の塾工房たまご))</p>	<p>1壘-6 『マジックの驚きを環境体験の驚きとともに出来ないか』 浅見 哲(公益社団法人日本環境教育フォーラム)</p>	<p>2壘-6 『「ESD活動支援センター」ができました!』 村上 千里(特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議/ESD活動支援センター)</p>	<p>3壘-6 『自然から学ぶ場と人の全国フォーラム2017・予告編』 森 高一(特定非営利活動法人日本エコツアーリズムセンター)</p>
<p>⑦ 18:00</p>	<p>フォーラムショップ オープン準備</p>	<p>1壘-7 『アウトドアで、「未来をつくる力」を育くむ人づくり。』中澤 朋代(特定非営利活動法人日本エコツアーリズムセンター)・山田 俊行(トヨタ白川郷自然学校)</p>	<p>2壘-7 『自然の変化を調べよう!「モニ1000」へのお願い』 青木 雄司(公益財団法人 神奈川県公園協会)</p>	<p>3壘-7 『富士山麓ごみ問題解決への取組 since1998』 米山 裕美子(認定特定非営利活動法人富士山クラブ)</p>

**【第二部】20:25～21:00(予定)**  
**※発表時間は各回10分です**



時間	【場所: 1 壘】	【場所: 2 壘】	【場所: 3 壘】
⑧ 20:25	<p>1 壘-8 『街で始める「ていねいな暮らし」』 多胡 亮 (公益財団法人京都市環境保全活動推進協会)</p> <p>京都市伏見区にある京エコロジーセンターでは、街中にある施設の特徴を活かしてイベントを実施しています。屋上のビオトープには、狭いながらも田畑や池があり、年間を通じて親子が様々な体験をしています。大人向けには、衣食住といった普段の暮らしと自然とのつながりや見えづらい背景を体験的に学ぶ連続講座を実施しています。楽しみながら持続可能な暮らしを始める取り組みをご紹介します。</p>	<p>2 壘-8 『「日本型環境教育」から「日本的環境教育」へ』 新田 章伸(特定非営利活動法人里山倶楽部)</p> <p>清里フォーラム、清里ミーティングから生まれた本、「日本型環境教育の提案」(1992年)、「日本型環境教育の知恵」(2008年)のタイトルは、心に響くものでした。私なりの日本型を目指し、里山を拠点に活動する中で、「日本的自然観」というキーワードに出会いました。その自然観の実践研究会を立ち上げ、「日本的環境教育」を模索しています。</p>	<p>3 壘-8 『「野外・災害救急法」ってどんな救急法?』 本杉 美記野(一般社団法人 ウィルダネス メディカル アソシエイツ ジャパン)</p> <p>世界25か国で選ばれているWMAの野外・災害救急法。日本に入ってから10年目を迎え、ようやく国内でも少しずつ知られてきました。最近では野外活動や救助に関わる人たちの研修、大学の授業などにも取り入れられ始めています。でも、まだまだ「それって何?」の人も多いはず。世界でも、日本でも、選ばれているのには訳があるんです。そんな私たちWMAの野外・災害救急法の考え方や講習スタイルをちょこっとご紹介します!</p>
	<p>⑨ 20:45</p>	<p>1 壘-9 『利用者による国立公園管理を目指して』 小沼 秀樹(特定非営利活動法人大雪山自然学校)</p> <p>日本最大の国立公園、大雪山国立公園。最高峰旭岳の中腹には噴火によって出来た姿見の池、その周辺を巡る散策路では、本格的な登山装備がなくても気軽に高山植物を楽しめます。夏には高山植物の大群落、秋には色鮮やかな紅葉。まさに天上の楽園のような美しさです。私たちは「利用者自身による国立公園の管理」を目指して、入山前のレクチャー、巡視、登山道整備等の活動をしています。</p>	<p>2 壘-9 『南アルプス生態邑における滞在型環境教育の実践』 小河原 孝生(特定非営利活動法人生態教育センター)</p> <p>この40年、私たちの自然系環境教育は、持続可能な社会形成に貢献してきたのだろうか? 解説も参加体験型も手法であり、目的ではない。個人や社会の容を促すためには、どのようなプログラムが有効なのか? その一つのモデルとして、南アルプス生態邑では、野生生物と共生する食と農の地域づくりを進めるとともに、科学と文化を融合しフィールドを活用した、滞在型の環境教育プログラムを開発・実践してきました。</p>

---

## 2日目 参加者企画ワークショップ

---

参加者自身が企画・実施者となるワークショップを開催した。2日目の早朝に1時間、午前に160分、午後に80分のワークショップを実施。また、実施者でない参加者は自身の興味・目的に合わせて参加プログラムを選択。参加者同士の活発な意見交換が行われた。

また、ポスター掲示の会場を設け、30名の参加者が掲示を行った。会期中は自由に閲覧することができ、2日目の昼食をはさんで、ポスター掲示を行った参加者から直接話を聞いたり、質問をしたりできる「ポスターセッション」が行われた。



---

## 160分ワークショップ

参加者がそれぞれ企画・実施者となり、参加者同士が刺激を受け合い、意見を出し合い、共に学ぶ場。

1. 持続可能な社会づくり、企業の役割とは
2. 持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」
3. エディブル・スクールヤードをはじめよう！
4. 環境教育業界×私たち、若手の関わり方
5. 祝 30周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る
6. 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て
7. エネルギー大臣になろうワークショップ
8. 清里ミーティング「30+30」
9. 森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵
10. 環境＝地球を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育

# 持続可能な社会づくり、企業の役割とは

実施者： 新田 章伸(特定非営利活動法人里山倶楽部)・ 國友 淳子(トヨタ自動車株式会社)・  
山口 進(パナソニック エコリレー ジャパン)

## 【概要】

持続可能な社会づくりについて、企業という立場からとらえ実施者と参加者全員でディスカッションを行うワークショップである。トヨタ自動車株式会社（以下トヨタ）とパナソニック エコリレー ジャパンの実際の取り組みについての発表を聞いた後、持続可能な社会づくりにおける企業の役割について意見交換を行った。

## 【実施内容】

### 1) 実施者の紹介とあいさつ

実施者の紹介をしたあと、今年の2月に行われた第12回里山フォーラム（兵庫県篠山市ユニトピアささやま開催）の話についてふれ、今回のワークショップの導入とし、企業ごとの発表につなげていた。

### 2) トヨタの発表

実施者の紹介の後、まずはトヨタの取り組みについての発表が行われた。森づくりの取り組みのうち、今回は愛知県の「トヨタの森」と「豊森なりわい塾」、三重県の「トヨタ三重宮川山林」の3つについての説明を聞いた。トヨタでは、森林とは「社会の基盤」という認識のもと活動が行われていて、取り組みの方針として森林の適切な管理を行い社会のニーズに応じた取り組みをし、それを情報開示していくということが挙げられた。自然体験学習や人材育成講座を通して、人・自然・伝統の繋がりを伝え、生き方・暮らし方を考えることを狙いとしていた。

### 3) パナソニック エコリレー ジャパンの発表

トヨタの発表の後、パナソニック エコリレー ジャパンの発表が行われた。環境ボランティアの総称としてエコリレーという言葉が使われていて、「地球市民として積極的に社員自ら環境活動を実践し貢献すること」が目指す姿として挙げられた。

また、エコリレーのリレーには「人・地域・活動をつないで次世代につなぐ」という意味が込められており、地域に根差した取り組みによって貢献していくという考えから、様々な活動のうち「BYOS（琵琶湖・淀川・大阪湾・瀬戸内海）クリーンネットワーク」と「ユニトピアささやま里山再生活動」の2つの取り組みの話聞いた。これらの取り組みの目

的として、「里山再生や生物多様性の保全」、「人と自然との共生」、「環境教育プログラムの開発」、「人材育成」などが挙げられていた。

### 4) ディスカッション

発表を踏まえてはじめは近くの人と意見交換を行い、その後全体でディスカッションを行った。その中で、持続可能な社会づくりのための取り組みや環境教育に対する「社内の認知」をいかに上げるか、理解を得るかという点に焦点が当てられた。企業関係者だけでなく別の立場の参加者からも意見が出され、活発な意見交換が行われた。

## 【まとめ】

議論では、参加者から、大きな力を持つ企業が社内外でこれまで以上に環境学習の機会を作る活動を求める声があった。実施者からは、現時点でもそうした活動は行われているが、継続し増やしていくためには、本業で行う環境対応ではできない環境課題に対して、様々な手法で社会貢献活動として取り組むことが本業の利益にも繋がるという事を社内で認知・理解してもらうことが必要になる。また企業が里山や環境に関する活動に関わることは、企業内外の人々が生き方・暮らし方を考える上でも必要になってきているという話があった。



【記録担当者】中澤 杏樹

# 持続可能な暮らしの日常を体験する「いつもの暮らし」

実施者：加藤 大吾(特定非営利活動法人都留環境フォーラム)

## 【概要】

「持続可能」とはそもそも何なのか、実際の生活の中で実践するにはどうすればいいのかという疑問・課題について、実施者の「いつもの暮らし」を一例に取り上げて考えたワークショップ。前半の1時間半ほどを使って、適宜参加者の感想や質疑応答を挟みつつ実際の暮らしをスライドで紹介し、残りの1時間で実施者が生産した食材を使ってグループごとの調理を行った。

## 【実施内容】

### 1) 参加者グループ分けと自己紹介・概要説明

はじめに参加者を4つのグループに分け、グループ内でそれぞれお互いの自己紹介を行った。その後改めて挨拶とワークショップの概要の説明を行い、今回のワークショップに期待することをグループ内での話し合いを挟んで全体で共有した。

### 2) 「いつもの暮らし」の紹介

実施者の「いつもの暮らし」をスライドで紹介した。途中で何度か話を区切り、参加者の感想などをグループ内で共有した後全体で共有・質疑応答をする時間を取った。

#### ①家の建設、田んぼ・畑の開墾、家畜の飼育

はじめに、家を実際に建設してから田んぼ・畑を始め、その後家畜も飼ったところまで紹介された。家の建設には基本的に木を新たに切り出さずに廃材を使ったこと、畑は夏の葉物を100%自給できることなど、数多くの具体的な暮らしの中身が紹介された。参加者からは「実際にやってみたい!」といった感嘆の声が多くあげられた。

#### ②子育て、ポイントになったこと、自給自足の捉え方

次に「いつもの暮らし」の中で実践している子育てが紹介された。刃物も遠慮なく使わせていたり、暮らしていく中で必要なこととにかくどんどんチャレンジさせていく姿勢が強く出ていた。また、様々な自給自足を実践していく中で分かっていった、「羊は飼いやすい」「米・大豆・小麦は重要」「循環のためにバクテリアも重要」といった、更に具体的なポイントも話題になった。自給自足については、「完全100%自給自足することはできない、仮にできたととしてもそれではつまらない」「一部だけでも自給していくことは重要だ」といった意見が展開された。

参加者からは、完全な自給だけの暮らしは不可能という意見に同意する声と共に、無理に自給自足を強いない人それぞれの幸せについても言及され、深い議論も全体で交わされた。

#### ③自己紹介補足、まとめ

スライドの時間の最後は、改めて具体的な自己紹介や公私それぞれで活動している事業の紹介が行われた。終わりには、教育の変容が価値観の変容を引き出し、多様な価値観を受容できる社会へとつながっていくという、まさに環境教育的な結びで締め括られた。

### 3) 食材の調理

後半は実際に「いつもの暮らし」の中で生産された食材を使い、グループごとに2品ずつを目標に、参加者による調理が行われた。自家製の鶏肉や鶏卵、野菜から加工品にいたるまで様々な食材が用意され、参加者はそれぞれ思い思いの調理を楽しんでいる様子だった。

できあがった料理をお互いに紹介した後はそのまま昼食の時間となり、支給された弁当と共にそれぞれ堪能していた。料理を全体で分け合いながら持続可能な暮らしに改めて思いを馳せつつ、そのまま各自解散の形で終了した。

## 【まとめ】

持続可能ということについて多くの疑問がある中で始まったワークショップであったが、「いつもの暮らし」の中での実践例を紹介し議論することで、明確な道筋が見えた。全てを自給する必要はないというハードルを下げる提案もあり、実際の調理の時間も含め、これからの持続可能な暮らしに対して実感を伴う充足した時間を過ごせたようだった。



【記録担当者】志田 麻子

# エディブル・スクールヤードをはじめよう！

実施者：西村 和代(一般社団法人エディブル・スクールヤード・ジャパン)

西村 仁志(広島修道大学)

## 【概要】

エディブル・スクールヤードというキーワードに興味がある、または自分が実践したい人が集まった。エディブル・スクールヤードとは「食べられる校庭」を指し、食べ物はどこからくるのかをテーマとして菜園とキッチンを通して行う教育手法のことである。アメリカ・カリフォルニア州で発祥し、日本でも教科と統合させて体験的に身につける学習手法として、学校に取り入れられている。このワークショップでは、まずエディブル・スクールヤード・ジャパンの活動について紹介があった後、実施者がエディブル・スクールヤードに抱える4つの課題をあげた。参加者は4グループに分かれて課題の解決案を話し合い、最後に全体で共有した。

## 【実施内容】

### 1) 自己紹介

4人のグループに分かれて、1人1枚ずつA4用紙に、名前、所属先、ワークショップに参加した理由・動機、このワークショップへの期待を記入して5分間グループ内で自己紹介を行った。その後、参加者全員に向けて1人20秒～30秒ほど自己紹介を行った。

### 2) エディブル・スクールヤード・ジャパンの取り組み紹介

まずは、エディブル・スクールヤードとは何か、日本の食育との違い、今後の課題と展開など情報の提供を行った。その後、8分間グループで感想や意見の交換を行い、質疑応答を行った。

出された質問としては、すぐに畑は借りれない、ガーデンティーチャーは地元の人でできる？など様々な質問が出されていた。そんな中、学校、NPO、地域の3つがキーワードとして上がり、三者が連携していく事が大切だとの考えが出されていた。

### 3) 実施者が考える4つの課題

実施者が考える、4つの課題があげられた。①学校や教育行政へのアプローチ方法、②日本型カリキュラムや教材の作成、③指導者の育成・ガーデンティーチャー・キッチンティーチャー・コーディネーター、④エディブルを知ってもらうこととファン協力者資金提供者をつくるには。

参加者は好きなテーマを1つ選び、4つのグループに分かれてそれぞれ20分間議論し、解決の糸口となる案を考えた。その後グループで出た解決案を全体に共有した。解決案としては、説得力のある資料を作成する、地域に入っていく、地域の中で人材を発掘など地域の視点が目立つ意見が多くあげられた。

## 【まとめ】

このワークショップのねらいのひとつとして、参加者が自分でもエディブル・スクールヤードの取組ができるようになることがあった。そのため、参加者も自分事のように考えながら議論ができ、意見や質疑が多く出された。



【記録担当者】吉田 直哉

# 環境教育業界×私たち、若手の関わり方

実施者：中谷 翔(南越前町地域おこし協力隊)・河又 彩(東京都狛江市立緑野小学校)

伊藤 由季(東京都立小峰公園ビジターセンター)・

中村 例(特定非営利活動法人キッピーフレンズ)・中村 幹

## 【概要】

環境教育に関心を持ち、学生時代に関わる学生は多いが、実際に仕事にするとすると抱える課題も多い。そんな課題に対し、所属をこえてつながりをつくったり、若手だからこそその想いや悩みを共有したり、全国の仲間と切磋琢磨できる環境をつくったりすることで今後の人生×環境教育を考えるきっかけにするために開催された。2度のグループワークを通し、参加者各々が大きな収穫を得ることができた。

## 【実施内容】

### 1) はじめに

まず、ユースミーティングの概要について話があった。ユースミーティングは2014年の清里ミーティングの全体会にて、若手が集まる会が開催されたことがきっかけで始まった。2015年はトヨタ白川郷自然学校、2016年は田貫湖ふれあい自然塾にて開催されており、今回は清里のキープ自然学校にて開催が予定されている。

### 2) 自己紹介

①呼ばれたい名前、②なぜこのワークショップに来たか、③どこから来たか、④普段なにしているか、の4項目をもとに1人1分で自己紹介を行った。参加者は20代から30代の若者が多く、全国各地から様々な目的を持って集まって来ていることがわかった。

### 3) テーマ出し

どのような人が集まったのかを知ったところで、各自話したいテーマをポストイットに書き出し、テーマに分けて話し合った。①学校・子どもをキーワードに、学校での環境教育を話し合うグループ。②海や虫、きのこなどターゲットをしばった環境教育について話し合うグループ。③トークや見せ方、SNSでの発信など仕事上で身につけたいスキルについて話し合うグループ。④収入を得ていくためにはどうしたらいいのか、就職する上での不安などについて話し合うグループの4つのグループができた。ほかにも話したい案として、研究と実践の違いや環境教育の定義、若者の意識改革などの意見も出たが、ユースミーティングならではの話題として4つに絞られた。

### 4) 話し合い①

20分ほど話し合ったのち、各グループで話し合われた内容の共有を行なった。①グループ：悩みの共有や、子どもの心をつかむ方法、学校教育に取り入れる方法。②グループ：各自関心のある生き物を紹介して、語り合う生き物サミットを開催したい。③グループ：ニーズによって臨機応変に伝える方法を変える必要があるという認識が持たれた。④グループ：仕事として就きたい側はどう就きたいか、受け入れる人はどんな人を受け入れたいかについて意見が出し合われた。

### 5) 話し合い②

一度休憩をはさんだ後、各々が1回目とは違うテーマを選び、再度グループワークがなされた。2回目のグループワークでは、①では被災地における環境教育について、また②では1回目に出された生き物サミットの広報について話し合われた。③はもっと魅力があるのに、その魅力を伝えきれないといった悩みや、テーマを持って成果をつくることについて話し合われた。最後に④では、必ずしも環境教育を仕事にしなければよい。ボランティアでやっていく方法もあるという話や、理想と現実のバランスの取り方が大切であるという話がなされた。

### 6) まとめ

最後に、次のステップにつながるようなアクションプランを各自紙に書き出した。「環境分野に携わり続けたい」「イベントを主催したい」「自然が好きな子どもを一人でも増やしたい」「若手の友だちをもっと増やしたい」「自分の仲間と共有したい」など今後、実行できそうな前向きな意見が多く出された。

## 【まとめ】

全体を通して、若い世代が集まっただけに意欲や熱意があふれたワークショップとなった。終了後の交流や名刺交換は時間ぎりぎりまで続き、まだまだ話したりないという意見が多くあがった。そのため翌日の当日ワークショップにはこのワークショップから3つのプログラムが生まれた。今後もユースミーティングのつながりは広がりを見せていこう。

【記録担当者】大垣 柚月

# 祝30周年☆清里ミーティングにまつわるコピーを作る

実施者：高瀬 桃子 (Willing Hands On)

## 【概要】

このワークショップでは、「受け手にとって魅力的なコピーを作る」をテーマとして実施した。環境教育、特に自然体験活動の現場で伝える活動をしているインタープリター。企画から広報まで携わるなど様々なスキルが必要とされる中、言葉で伝える場面も多く、一目で興味を抱かせるような「より魅力的な言葉」の作り方を知る第一歩とした。ワークショップでは、レクチャーを踏まえたうえでグループおよび個人ワークを行い、最終的にはアイデアから各自でコピーを完成させることを目標として実施した。

## 【実施内容】

### 1) はじめに

実施者が環境教育の現場で働いていた頃、インタープリターが広報で企画の魅力を伝える事に苦勞していることを知った。それを受け、伝える技術(コピーライティング)を研鑽するようになったが、その過程で「インタープリターこそ、魅力的な言葉を考える”下地”はすでにある」ということに気づいた。そして、環境教育の場で働く人たちの広報の手助けがしたいという思いから、自ら Willing Hands On という団体を立ち上げるに至る。これまでに培われた経験や、そのエッセンスを伝えたいという経緯で、当ワークショップを実施することにした。

### 2) キープ協会スタッフ川村悦子さんの話

現在はインタープリターの仕事をしているが、以前はコピーライターとして活躍していた。広告を作るには、等身大の自分をさらけ出すくらいの度胸が必要だと語る。また、広告は発信者から受け手に向けて作られるものだが、一方広告を発信する者自身の内側に向けて発信しているものでもあるとも話があった。

### 3) レクチャー

参加者の自己紹介を行った後、レクチャーを行った。コピーは、自分が言いたいことを伝えるだけでなく、受け手に、より価値を感じさせるように作らなければならない。そのためには、そのものの描写を謳うだけではなく、誰かの何かの解決になることを伝えるコピーにすることが大切であるとレクチャーした。

例) ロボット掃除機のコピー

▲描写 「ロボット掃除機は自動で掃除してくれる機械です。」

◎解決 「パパがロボット掃除機を連れてきました。ママの笑顔が増えました。」

### 4) グループワーク&個人ワークでコピーを作る

受け手の立場になって客観的にコピーを考えるための手段として、様々な新聞や本から気になる言葉、魅力的に感じた言葉を各自できるだけたくさん付箋に書き出した。そして全体で、そのワードを似たもの同士でグルーピングした。グループワークで出た言葉を参考にして、「清里ミーティングの新聞広告を作る」を設定で、各自コピーを作成した。その際、誰かの顔を浮かべて手紙を書く気持ちでコピーを作るようアドバイスした。

### 5) 発表・共有

各自キャッチコピーを発表。なぜこのコピーを考えたのか、伝えなかったことは何かを補足しながら発表した。

## 【まとめ】

このワークショップの目標として、各自で清里ミーティングの新聞広告のコピーを完成させることが掲げられた。一人でコピー作りに取り組むと、発想が偏り、客観的に考え抜くことは非常に難しい。しかしグループワークを通じて他の人の考え方に触れることで、貴重なヒントを得たり考えたりすることができ、結果的に独自で考えるコピーをより良いものになった。しっかりと受け手の心に響き、行動を促せるような魅力的なものにするためには、受け手にとって魅力的なことは何なのかを考える必要がある。日々膨大な情報であふれかえる現代社会において、少しでも受け手の立場を意識するきっかけになったのではないかな。



【記録担当者】西尾 有香音

# 自然をフィールドとした父親参加型のわんぱく子育て

実施者：佐野 由輝(特定非営利活動法人イクメンクラブ)

## 【概要】

自然の中で子ども同士だけではなく、父親(母親)も主体的に参画することのできるフィールドワークについて考えるワークショップであった。子どもを持つ親や企画者として自然学校や幼稚園・保育園に関わる人が集まり、親子の抱える問題等を背景に話し合いを行った。その後外に出てグループ毎に親子で一緒に成長できるプログラムを作成した。

## 【実施内容】

### 1) 自己紹介・動機

参加者同士の自己紹介および、このワークショップを選んだ動機について話し合いを行った。実施者は当初、子をもつ親が集まると予想していたが、幼稚園・保育園に関わる女性や自然学校で子ども向けの体験学習をして、今回親子で体験できる企画を考えるために参加した方もいた。実施者の予想を良い意味で裏切る形となり、様々な分野の方がワークショップに参加していた。

### 2) グループワーク①(自分の家族自慢)

自己紹介の終了後、一人一枚ずつプリントが配布され、それぞれの家族の自慢話について書き出し、現在の家庭環境や、自分自身が子どもだった頃の両親の姿を思い浮かべながら、参加者同士話し合いを行った。子どもの頃に両親から食育を受けていて現在好き嫌がなく、食への関心をもって生活をしていたり、仕事が休みのときは積極的に子どもを野外へ連れていき、子どもに対しても全力で遊んでいたりと、多くの温かいエピソードを語り合っていた。

### 3) グループワーク②(親と子の見える化)

続いて、親子参加型のフィールドワークを考える上で背景となる、親と子どものそれぞれの立場で抱えている問題及び親子が主体的に参画する自然をフィールドとした活動を実施した場合のメリットを出し合った。今回ワークショップに子を持つ親だけではなく、様々な分野の参加者がいたため、意見にも多様性があった。例えば『子どもの抱える問題』として「親・先生以外の大人との関りが無い」、「宿題や授業の時間が多いため、遊ぶ時間がない」といった実際に子どもを持つ親の立場からの意見や、「TVやPCの情報が溢れている」、「火や刃物に触れる機会がない」といった時代の変化による子どもの周辺環境の変化について書き出された意見もあった。他方、親子自然体験活動によるメリットとしては、「命のつながり、命の大切さを知る」「危険の度合いを知る」といった意見の他

「親子の会話がはずむ」「多様な大人と出会う」といった親子企画ならではの意見が出た。その後出た意見をグループ分け及び関連づけし、それらの意見を背景にどういった親子参加型のフィールドワークが良いか、清里をフィールドワークとして2グループで森の中に出て、歩いて意見を出し合った。

### 4) プログラム作成・発表

15～20分ほど森の中で話し合った後、屋内に戻り、改めてグループ毎にフィールドワークを行うプログラムの”テーマ”と”目的”、”スケジュール”を模造紙に書いていった。最初のグループは、グループの中でもキーワードに挙がっていた”焚火”を中心にプログラムを作成していた。秋の清里で火を囲みながら、家族や友だちとつながるということをプログラムのテーマに考え、まずは落ち葉集めを楽しんだ後、自然のものを活用してスポーツをしたり、お箸や竹トンボなどの木工を行い、最後に焚き火を囲んでふりかえりをするという内容だった。もう一方のグループも”焚火”を中心としたプログラムを作成していたが、その他に、1日を通したサブ企画として、「枝を両手いっぱいひろう」「大きな木に抱きつく」「全員と握手する」「お父さん以外の人に生きもののことについて聞いてみる」などの題を書いたビンゴを作成して、自然体験活動を通して、親子の関係や親同士、子ども同士の縦横の関係だけではなく、他人の親・他人の子どものような斜めの関わりができるような工夫をしていた。

### 【まとめ】

ワークショップを通して、子どもだけではなく親子として参画できるようなプログラムをグループごとに形にした。またプログラム作成の背景として、親と子どもの抱える問題やメリットを明記し、メリットを活かしながら問題を解決できるようなプログラムを、様々な分野の参加者で話し合うことができた。また最後の参加者の感想の中で、今回作成したプログラムをやってみようという声が出るように、参加者の次につながるワークショップとなった。



【記録担当者】釜谷 優太

# エネルギー大臣になろうワークショップ

**実施者:** 藤木 勇光 (J-POWER 電源開発株式会社)・小西 金平 (J-POWER 電源開発株式会社)  
浅見 知冴 (J-POWER 電源開発株式会社)・小寺 昭彦 (サイエンスカクテルプロジェクト)

## 【概要】

このワークショップでは発電所やエネルギーのことについて、グループごとにコミュニケーションを取り合い、カードゲームを通じて学びを深めていった。分かれたグループはそれぞれ異なる「国」とみなし、違う条件のもとそれぞれの国の政策を考えた上で、発電所をどのように置いていくのかを話し合いで決めていく。お話を聞くだけでなく、参加者が発電所の特性やエネルギーのバランスを自分達で考え、主体的に参加して取り組むことができるものであった。

## 【実施内容】

カードゲームを使った参加者体験型のワークショップであると同時に、iPadを用いて計算や集計などを行った。

### 1) 閣議

最初にそれぞれの国の大臣(グループリーダー)を決め、大臣を中心に話し合いが進んでいく。次に各グループに、「国カード」というものが配られる。「国カード」には国の特徴や条件、予算など様々な情報が載っている。配られた「国カード」をもとに、自分の国に必要なエネルギー政策を話し合いで決めていき、その政策を公約として掲げ、国の方針を決定する。

### 2) 第1ターン

各グループには、「国カード」以外に「発電所カード」というものが配られる。「発電所カード」は全ての国に同じものが配られ、最初に引いた「国カード」の条件を考えた上で発電所を建設していく。第1ターンが終わると、「イベントカード」という、国に影響が出るカードを引くことになる。「イベントカード」には、地震、戦争、気候変動、反対運動など様々にあり、ゲームマスター(主催者の方)が全国共通に影響する「イベントカード」を一枚引き、それぞれの国の大臣が一枚「イベントカード」を引くため、各国2回のイベントが起こっている。イベントは建設した発電所に影響するため、エネルギー政策を見直して対応する必要が出てくる。

### 3) 中間発表

第1ターンの発電所建設と、イベントの結果を他国と比較し、現時点での国の状況を見る。

### 4) 第2ターン

第1ターンで起きたイベントの影響を考慮したうえで、発電所の建設をする。基本的に第1ターンとやることは同じだが、第2ター

ン終了後も「イベントカード」が2枚引かれ、各国の発電所に影響を及ぼす。第2ターンが終了すると発電所を建設することが出来なくなるため、最後に当たるイベントは国のエネルギー政策を左右する可能性があるので重要になってくる。

### 5) 最終結果

第2ターンの発電所建設と、イベントの結果を他国と比較し、最終的な国の状況を見る。状況を知る術として、iPadに各国の評価が出されている。評価の種類には、「電気料金」、「環境負荷」、「稼働率」、「自給率」の評価に加え、他国との競争で割り出される「国の目標達成度」とそれぞれの国で自国を評価する「合意形成」の6種類をそれぞれ5段階評価で評価を下していく。6種類の評価を合算し、最終的な国の評価が決まり、ゲームの勝敗が決まる。

### 6) 結果発表

各国の最終的な評価を発表する。他国とはどのような点で政策や評価が違ったのかを見直し、皆で結果や意見を共有する。

## 【まとめ】

このワークショップは、参加者が主体的に参加することが出来ると同時に、カードゲームという手法を用いているため、参加者全員が発電所やエネルギーについて楽しく学ぶ機会になった。全体の雰囲気としても、参加者同士で話している様子や、エネルギー政策について真剣に考える様子からは、楽しそうな空気だけでなく真面目な空気も醸し出され、ゲームが終わった後、参加者の表情から充実した様子が伝わってきた。最後は実施者と参加者の全員で意見を交換し合い、環境教育という視点で全員がそれぞれに刺激を受けたように見えた。



【記録担当者】山口 恭平

# 清里ミーティング「30+30」

実施者：大前 純一・高野 孝子(特定非営利活動法人 ECOPLUS)

## 【概要】

清里ミーティングが始まった30年前当時は、公害などどのような課題があったのか、その後、環境教育や自然学校がどのように進んできたのかを振り返った。未来に向けては、さらにデジタル技術やグローバル化が進む中で、環境教育はどのような役割を担っていくのかを議論した。

## 【実施内容】

### 1) 自己紹介

18歳から80歳台まで幅広い参加者だった。親に連れられて自然や環境への関心を高めたという若者たちも多かった。

### 2) 基調トーク

84歳の誕生日を迎えたばかりの北野日出夫氏（日本環境教育フォーラム理事）が、環境についての個人史を語った。「育ったのは、現在の東京都中野区。周囲には小川や田んぼがあり、土の匂いをかいで育った。時にはカエルやトンボを遊んで殺してしまったこともあった。殺したことで生きていることのすごさを知った。東京大空襲ではB29の銀色の翼にポパイが描いてあり、そこから落ちてきた焼夷弾の直撃で片腕がすっ飛ぶ人も見た。進学する中学校が焼けたので埼玉県農学校に行って、そこから生物学への道が始まった」。生々しい話に、若い参加者が、驚いた表情で聞いていた。

### 3) ディスカッション

50歳代、60歳代のベテランがそれぞれ加わった5つのグループに分かれ、30年前から今まで何があったのか、話し合いながら、キーワードを横長の紙に書き込んでいった。環境教育がどのようなプロセスで現在に至ったかや、30年前より昔にあった公害も話題になった。ベルリンの壁崩壊、リオサミット、阪神大震災、京都議定書、ヨハネスブルグサミット、東日本大震災などの30年間で、自然学校が2,000を超え、CO2濃度が50ppm上昇ことなどを確認した。今後は、「課題に向き合う勇氣」「自然観察から社会を見る力」「キツネにだまされる精神性の取り戻し」などが大切だと指摘された。

### 4) 30年後に大切なもの

グループワークのまとめでは、今後は、「環境教育をどのようにしたらもっと広まっていくのか」という論点が提示された。それに対して「子どもたちではなく親たちにも環境教育を伝えることが大切」「子どもにもっと自然と触れあう機会を提供する」「生活に環境教育を入れる」といった意見が出された。

## 【まとめ】

30年という長い期間で若い世代に環境教育が受けつがれていっていることが分かった。今後長期的に環境教育を広げていくには、親たちに対してどのように伝えていくのかという課題も見えてきた。親を通して、子どもたちに自然に触れ合う機会が生まれる。さらに社会課題や世界とつながった環境教育の大切さも示された。



【記録担当者】浜崎 竜斗

# 森の中でサイエンス～動物たちの生きる知恵

実施者：鴨川 光・柴原 みどり(ジャパン GEMS センター)・武石 泉(日能研)

## 【概要】

生物の形や生態を、どうしてそうなのか・どういう意味があるのかを考え視野を広げることについて考える内容のワークショップ。

全体を通して、事実を知ることよりも、そこに行き着く思考の過程を大事にしていくことに重点が置かれた。生き物の進化の過程を自分たちで考えることによって、生き物たちが自然の中でどう自衛しているのか、どう他者を補食するように進化してきたのかを考えた。

それによって、即時的な解決力よりも長期的な問題解決能力を身につけることの大事さについて触れた。

## 【実施内容】

### 1) お弁当カードゲーム合わせ

カードを使ってアイスブレイクを兼ねたゲームを行った。1枚ずつ絵柄の違うお弁当が描かれたカードを1人ずつ配り、共通点を探した。

### 2) フクロウのお話を聴く

フクロウが登場する絵本を使って導入。GEMSは子どもを対象として行われるプログラムのため、子どもが興味を持ちやすい。

絵本の読み聞かせがあった後、フクロウのイラストや写真を見た。写真を全員でじっくり見て、フクロウの体のつくりなど、そこから分かることを話し合った。

### 3) オリジナルのフクロウを作ろう

フクロウの写真をじっくりと観察した後は、クラフト工作。観察してわかったことをもとに、画用紙のフクロウをそれぞれ作った。目、クチバシ、羽、等々。それぞれが観察して感じたこと、想像できたことを形にした。

それぞれのオリジナルフクロウが出来上がると、全員で外へ出て、フクロウの家になる落ち葉を拾った。茶色の袋状の紙の中央に穴をあけると、その中に拾った落ち葉を入れた。そこへ中央に開けた穴からオリジナルフクロウが顔を出し、クラフトは完成した。

### 4) 動物の自己防衛

ところで、このフクロウはなぜこのような体や生態をしているのだろうか。続いて、生き物の進化を自分で考え、自己防衛について想像する時間となった。

参加者に配られたのは、キバもツメもトゲもない、自分の身を守る術を持たない生き物の形をした画用紙。もしこの生き物が、ティラノサウルスに襲われたら？1人ずつが自己防衛の方法を考え、その生き物につけていった。完成後、どのような防衛行動や機能をつけたのか、それぞれティラノサウルスに襲われた時の実演をしながら解説した。

最後に、GEMSの大切にしている概念や想いを実施者から解説して、終了した。

## 【まとめ】

参加者は終始楽しげな様子で、自身が持っている知識から、どう思考していくかが子ども達にとって重要ということはこのワークショップから学んだ。

フクロウ作りでは、自身のオリジナル性を盛り込んだ作品を作り出していた。愛着を持てると、とても満足な様子だった。

また、進化を自分で考えるプログラムでは、大人とは思えないような、ファンタジーな要素を多く含んだ答えを出す人が多くとても驚きだった。知識は必要だが、大切なのはそこから想像力を働かせるプロセスである。



【記録担当者】大河内 友翔

# “環境”＝“地球”を感じてみよう！天文のイロハ for 環境教育

実施者： 齊藤 透（〈月〉の会・東京） 中村 照夫

## 【概要】

天体を通じて「巡る季節の正しさ」「巡る季節の懐かしさ」「未来の確かさ（希望）」について考えていく。このワークショップでは、「自<sup>ら</sup>模る<sup>る</sup>愉<sup>し</sup>み」をキーワードとした。自模る<sup>る</sup>愉<sup>し</sup>みとは、「自分で築いて（気づいて）楽しむこと」。色付き粘土を使って目に見える形で地球と月の距離を体験し、さらに外で地球と太陽の距離を体験する。そして、それらの大きさの比を同じにすることにより、さらに体験に現実味が出てくる。このようにして身近な地球や月、太陽を体験した。

## 【実施内容】

### 1) 地球学、自模る面白さ

月の満ち欠け、月からの重力などから天体の面白さを見つけた。太陽の動きは絶えず続いている。床にある柱の影に印としてテープを貼っておくと、太陽の動きを目視できるようになる。160分のワークショップ時間中にも影は動き、テープを貼った時点からの違いが目視できた。

### 2) 暦、太陰暦、太陽暦

暦や方角などは様々なところに関係している。昔話に関係しているものもあり、例えば方角でいう鬼門の反対にある干支は申、酉、戌ということで、桃太郎の仲間の3匹であるという説。自分の誕生月や星座をもとに、太陰暦ではなに？太陽暦では？という問いから、太陰暦と太陽暦の違いについて講義があった。現在用いている太陽暦と太陰暦、太陰太陽暦との違い、それによって日付の概念などが違うこと、そのため太陽暦と太陰暦では誕生月が変わることがあり、同時に星座も変わるという話がされた。

### 3) 粘土で地球、月作り

青と黄色の粘土で1cmの地球と3mmの月を作った。それを約30センチ離すと実際の距離と同じ比率になる。参加者は、自分たちの思っている距離の概念と実際が違ったという感想が多く出された。続いて、実施者の作った地球で宇宙ステーションほどのあたりを飛んでいるかなどの話の後、白い粘土を青い粘土に練りこみ、青い地球に白い雲を表現した。夢中になって2、3個の地球を作る参加者もいた。

最後に、「地球が1cmなら太陽はどのくらいか」という発問によって、実際に直径約1メートルの反射板を参加者の前に広げて、太陽との大きさを比べた。

### 4) 太陽と地球の距離感？

太陽と地球の大きさの違いは？その距離感は？という問いかけからそれを確かめるために外で実際の距離感に模型を置いてみた。1cmの地球から120cm離れたところで反射板の太陽を置き、地球から見てみるということをした。いかに地球が小さいか、いかに太陽が大きいかということを感じることができた。そして、太陽と月がほぼ同じ大きさに見えるという偶然も再認識することができた。

## 【まとめ】

天体という規模の大きなものを表わす際、粘土を使って身近な大きさに縮小し、目で見て体験できるようにすることにより、参加者は現実的な体験をすることができた。地球と月の距離を目で見える形で体験した参加者は感嘆の声をあげていた。暦や太陰暦、方角などという要素からでも、自分のよく知っている物語と関係しているという考えが出てきたことも参加者にとっては驚きであり、「自模る<sup>る</sup>愉<sup>し</sup>み」を見つけるきっかけとすることができた。



【記録担当者】 中西 恵基